大量生産の時代に「立ち止まった工業デザイナー」秋岡芳夫との出会い

豊かな社会を平和に持続させるのは「工作を楽しむ心」である
―秋岡芳夫の「モノ・モノ運動」

日本で最初期の工業デザイン事務所「ＫＡＫ」を設立し、戦後の工業化黎明期に家電や家具、寝台列車、そして今でも現役の三菱鉛筆「ｕｎｉ（ユニ）」など、４０００点以上を手がけた工業デザイナーの秋岡芳夫さん（１９２０～１９９７年）。しかし、やがて秋岡さんは、工業が進歩するほど、日本の固有の生活文化、とりわけ地方の職人の手仕事が消えていくのに危惧を抱くようになりました。

人間の尊厳が大切にされる社会を平和に保つには、人は創造し、工夫し、工作を楽しむ心の豊かさがなければならない、そう考えた秋岡さんは、これまでの工業生産を指導してきた立場から一転して、大量生産・大量消費をやめてモノを大切にする愛用者になろうと決意したのです。そして１９７０（昭和45）年ころから、自らを「立ち止まった工業デザイナー」と名乗り、賛同する仲間たちと、者と物のいい関係をつくる「モノ・モノ運動」を展開しました。

秋岡さんの主宰するモノ・モノサロン（東京・中野）を拠点に、プロジェクトごとに賛同するメンバーを集めて構成するグループモノ・モノ。彼らによって、１９７１年に東京で「今日のクラフト展―暮らしの提案」が開催され、暮らしの道具として何がよいもので、どう使って、どう大切にすべきかが具体的に示されました。

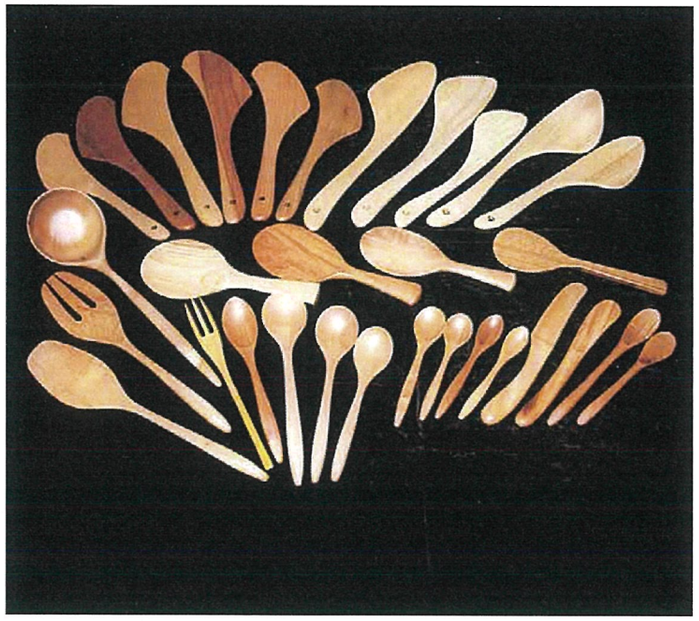
この展覧会はその後、京都、仙台と巡回。その反響の大きさに応えて、１９７４年には、「素木（しらき）のモノ展―木とつき合ってきた日本人」が東京、名古屋、札幌、京都で開催され、展覧会方式による手仕事でつくられた木の生活用具の流通が試みられて、好評を博したのです。こうした活動は、木を愛する生活文化が日本に健在であること、これからもよい製品が生まれることを期待している愛用者が多いことを浮き彫りにして、頑なな職人たちを励まし、彼らの社会参加を促すこととなりました。

このころ、大分県日田産業工芸試験所に勤務していた私も、縁あってモノ・モノ運動に初期のころから賛同し、産地紹介とつくり手たちの研鑽になるよう、秋岡さんとグループモノ・モノが企画する「木のもの展」や「いいものほしいもの展」など、地方の職人たちのすぐれた仕事を紹介する展示会へ、林業現場の有利性を生かした「山村クラフト」を出品し続けていたのです。

樹皮を生かしたクヌギ皿（写真：熊本市・熊本県伝統工芸館）

地域おこしはオーダーメイドの「コミュニティー生産方式」で

秋岡さんは個人のデザイナーとしても、北海道や



身近にあるさまざまな樹種による調理器具のいろいろ

大分県で、その地域の素材を生かしたクラフト製品づくりについて、デザイン、製作はもちろん、商品開発から流通に至るまで指導していました。当時、過疎化が進む農山村では、地域経済の振興のために、伝統工芸を産業として取り組もうという動きが各地で起こっていました。しかし秋岡さんはこれを「ムラおこし、町おこしを工芸で、という考えは甘い。どだい工芸ほど儲からない商売はない。たっぷり時間をかける手仕事だから、手間賃の高い日本では産業化・企業化は無理である」とし、高品質でかつ誂え（あつらえ）（オーダーメイド）がきくようなものづくりを地域の小さなコミュニティーで行なう「里ものづくり」を提唱したのです。「里もの生産方式（コミュニティー生産方式）」の概念はここから広まっていきました。

１９７７（昭和52）年、秋岡さんは「モノ・モノ運動」の賛同者だった東北工業大学の山下三郎教授に乞われ、宮城県仙台市にある同大学の工業意匠学科教授に就任。学科長となって、翌年にはトヨタ財団の研究助成金を受け、第三生産技術研究室を創設しました。

秋岡さんは家電製品や車など、大手企業の純工業的設備投資によるベルトコンベアやロボットを使っての生産のかたちを「第一生産技術」、地場企業や漁業組合や畜産組合のような業種別組合の生産のかたちを「第二生産技術」と分類。それに対し、山村の地域では、そのどちらでもない向こう三軒両隣的仲間同士のコミュニティーによる生産のかたちがあり、そこでは地域の風土や生活の知恵が反映されて、豊かな生活用具がつくられているとして、これを「第三生産技術」と呼びました。そして、工業化社会の発展の中で職人の技術やコミュニティーが急速に失われつつあった中で、この「第三生産技術」を支援する目的で、研究室を設立したのです。

この研究室では「コミュニティー機能の再生・増幅」のために、余暇時間を活用する「裏作工芸」の実践的研究が行なわれ、地域の資源を生かし、そこに住む一人ひとりが得意なことを伸ばすことを通して、地域全体を手づくりの里とする「一人一芸の村」の構想が提案されました。

山村クラフトの作品　蓋つきの白い器
「オケクラフト」

大野村での「一人一芸の村運動」の実践

秋岡芳夫と大野村との出会い

１９７８年、岩手県工業試験場を介して、秋岡さんに岩手県大野村（現・洋野町）から、過疎農村再生の相談が持ち込まれました。

１９７０年代の岩手県大野村は、大きな産業もなく、農業と酪農が中心の寒村でした。自然条件の厳しさから、大工や土工として一年を通しての出稼ぎが多く、当時の村民１万７３００人のうち１１２０人が出稼ぎに出ていたほどで、その高い割合から「日本一出稼ぎの多い村」と呼ばれていました。

村に一軒だけの木工所を営んでいた三本木烈（いさお）さんは、当時30代半ば。工業化によるアルミサッシの普及で建具の仕事が減り、村のすすめで大野民芸家具協同組合を設立して、県の補助事業である出稼ぎ解消実験事業で民芸調の木製玩具づくりを試みたものの、うまくいっていませんでした。

状況打開のヒントを求めて、グループモノ・モノが仙台で開催した「木のもの展」へも行きましたが、当時話題の木の生活用具といっても、これまでに見たことのないものばかりで自力で取り入れるのは難しそうです。そこで三本木さんは県主催の地場産業セミナーに出席した際に、県の工業試験場の湯口晴彦さんの紹介で、講師であった秋岡さんに大野村への来訪と指導とを直接懇願したのでした。これが秋岡さんと大野村を深く結ぶきっかけとなったのです。

その後、湯口さんの案内で大野村と周辺の久慈市のパルプ材集積場を視察した秋岡さんは、直径90㎝、長さ１ｍもの銘木の良材が、長さが短いというだけで雑木としてチップに砕かれてしまうという、あまりにも痛ましい有様を見ました。この経験から秋岡さんは、林業現場ではほぼ無価値とされるこれらの木が、大野村の出稼ぎ大工の手で活用できたらと考えたのです。

１９７９年、秋岡さんは「一人一芸の村」の構想に共鳴した大野村の佐々木義明村長から依頼を受け、村の工芸コミュニティー計画推進委員となりました。そして、東北工業大学工業意匠学科第三生産技術研究室の山下三郎、舛岡和夫両教授を先頭に、学科のすべての教員と学生が、大野村の地域再生を支援する実践的研究に踏み出しました。

そこでまず行なわれたのが、大野村の気候風土と農業・酪農・林業、それに暮らしや慣習、出稼ぎ対策、生活改善などをつぶさに調査することでした。